

平成26年2月27日

学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 中野 二郎 学生番号 8D502


〈論文題名〉 言語リズムが音声習得に及ぼす影響


—中国語母語話者と韓国語母語話者の漢語の発音を通して—


Influence on Acquisition of Phonetical Elements Caused by Speech Rhythm

—In Case of Pronuntiation of Japanese Words of Chinese Origin on Chinese
and Korean Native Speakers—

審査委員

主査 外国語学部教授 木村 政康 

副査 外国語学部教授 安富 雄平 

副査 外国語学部教授 小林 孝郎 

I. 論文の主旨

本論は、「言語リズム」を最大の研究テーマとし、リズムがいかに音声習得に関わっているかというマクロ的観点から音声教育について論を展開している。日本語学習者の発音指導法は、音声分析ソフト等によるマイクロレベルの情報を提示するだけでは、日本語らしい音声習得には直結しない。

日本語の漢字熟語として存在しない漢字2字の組み合わせを、言語リズムの差異が表出するサンプルとして選択し、漢字圏の学習者が日本語の漢字音をどのように聴取・生成するのかを調査実験した。漢字音が、言語リズムというフィルターを通してどのように変形し定着しているのか、それが日本語学習者にどのような影響を与えているのかを解明することを目的としている。

本論では、言語リズムを「調音における緊張の制御システム」と定義し、また、言語リズムを刻む単位（音節かモーラ）とフレーズを形づくるプロソディックな要素（ピッチかストレスか持続時間化）とに分けるという分類法を提案した。その分類に従い、日本語、中国語、韓国語各言語の言語リズムの特徴の明示を試みてもいる。

具体的に見ると、音節リズムの言語（中国語、韓国語）とモーラリズムの言語である日本語では、1音節（日本語の場合は軽音節のみ）で受容できる音の量が異なる。それ故、日本語の漢字音（音読み）は1拍で読む字と2拍で読む字の二通りができたとしている。本論では漢字音をH（VV、VC、CVV、CVCの重音節）とL（V、CVの軽音節）、LL（Lの連続）に分別し、漢語内におけるそれぞれのふるまいを検証している。

結果は中国語母語話者と韓国語母語話者にとって、HとLLは母語の1音節に近い無標な存在で、Lが有標な存在であるというものだった。Hと組み合わせたLが目立って伸長しやすいことから、それを言語リズムの相違という観点で説明している。

論文全体を貫く理論としては、VTSの全体構造的性、緊張という概念が挙げられる。この2つの概念を用いることにより、音の捉え方、指導方法において、一貫性を保つことが可能となったとしている。

また、本論で新たに考案した音声指導法を始め、VT法に基づく指導法、視覚情報を利用した指導法など数多くの音声指導法を紹介し分析している点も特徴と言える。言語教育分野の論文であるからには、理論だけでなく、実践に向けた具体例を提示することが重要であると考え、指導例を多く掲載している。

II. 論文の構成

本論文の構成は次の通りである。

1	序論	1
2	研究の意義	2
2-1	漢語を扱う意義	2
2-2	対象とする漢語	5
2-3	日本語教育への貢献	6
3	リズム	8
3-1	言語リズム	8
3-2	音節・モーラ	10
3-2-1	音節	10
3-2-2	モーラ	15
3-3	言語リズムの分類	17
3-3-1	言語リズムの分類	17
3-3-2	中国語の言語リズム	19
3-3-3	韓国語の言語リズム	20
3-4	リズムの指導法	21
4	調査	27
4-1	調査概要	27
4-2	結果	31
4-3	分析	37
5	実験	37
5-1	実験概要	37
5-3	実験協力者	39
5-3	実験結果	44
5-4	分析	48
6	考察	49
7	V T S	50
7-1	基本的概念	50
7-2	緊張度	56

7-3 VT法を利用した音声指導	58
8 音声指導	68
8-1 指導法の提案	68
8-2 実践・研究1	72
8-2-1 実験概要	72
8-2-2 結果	75
8-2-3 分析	78
8-3 実践・研究2	79
8-3-1 実験概要	80
8-3-2 結果	83
8-3-3 分析	86
9 結論	87
10 今後の課題	90
引用文献	93
参考文献	96
巻末資料1	100
巻末資料2	101
巻末資料3	107
巻末資料4	108
巻末資料5	109

III. 論文の概要

1 序論

本論文では、「言語間の距離」という概念を基にした日本語と他言語の音声上の距離について、そして言語リズムの相違が音声習得にもたらす影響について、漢語という日本語、中国語、韓国語に共通した語種を通して論を展開している。

文字において、中国語や韓国語といった漢字圏の言語は日本語と距離が近いと言えるが、言語リズムにおいては「距離」が近い言語とは言い難いとし、その理由としてリズム構造の違いを挙げている。

日本語はモーラリズム、中国語や韓国語は音節リズムという異なるリズムを持つという点から考えると、漢語の発音は語彙を共有しているが故に母語干渉が起きやすく、しかも化石化しやすいことが予想される。

一部の韓国語母語話者、中国語母語話者の漢語の発音は、非漢字圏の学習者にはない特徴があり聞き取りづらい。これには負の転移が起因しているとしている。

2 研究の意義

2章で、2-1「漢語を扱う意義」、2-2「対象とする漢語」、2-3「日本語教育への貢献」というテーマで論を進めている。

まず、2-1「漢語を扱う意義」では、次のように論じている。漢字は古代中国語を表記するために生まれた文字であり、必然的に日本語のリズムを表すのには適さない。音読みする場合、1拍で読む字と2拍で読む字の二通りがあり、日本語の音声において最も重視されるべきモーラが反映されていない文字であるとしている。

松崎（1994）の『分類語彙表』3万1千語を対象とした調査で、漢語は異なり語数で、和語や外来語よりも総数が多く、学習者にとって習得が困難とされる特殊拍の出現率が高いことが数量的にも示されている。

漢字圏からの学習者にとっての漢語は、母語の知識を利用しやすく親しみやすいが、母語の漢字音を手掛かりに発音してしまうため、母語干渉が現れやすい語種であるとしている。

漢字圏学習者が漢語をどのように発音しているのかを調査すれば、その結果が日本語の正しいリズムの習得にも役立つだけでなく、共有している漢字語彙の知識をアドバンテージとして十分に生かすことができると指摘している。

2-2「対象とする漢語」では、漢字2字から成る音読み語を漢語と呼ぶことにし、いわゆる和製漢語、江戸期に日本で生まれた語や、幕末以降、西洋からの文物を取り入れる際に日本で生まれた語も漢語として扱うとしている。

2-3「日本語教育への貢献」では、「言語は音声であり、文字は副次的である」という考えが言語学においては支配的であるが、それはローマ字を用いる西洋言語学で生まれた発想である。表意文字である漢字が文化の中心であった漢字文化圏に、その発想法をそのまま取り入れることには疑問を感じているとしている。日本語においては、同音異義語が20、30もあることが珍しくない等、文字が意味理解を補助している場合も多い。研究

結果を漢字圏学習者のための音声学習シラバスに生かす等、西洋の言語学のみならず、漢字圏学習者に対する日本語教育、音声教育の構築に貢献できるであろうと結んでいる。

3 リズム

3章は、3-1「言語リズム」、3-2「音節・モーラ」、3-3「言語リズムの分類」、3-4「リズムの指導法」というテーマで論を進めている。

3-1「言語リズム」では、ペタル・グベリナの言葉「人間の身体それ自体が構造的リズムを持つ」、馬塚（2009）の「韻律によるブーツストラップ仮説」（Prosodic Bootstrap Hypothesis）では、プロソディの習得が言語音の他の要素の習得を引っ張る役割を果たすという仮説を紹介している。また、ロベルジュ（1996）がプロソディの習得について、「経験を通して体得するものだ」と述べていることにも言及している。

リズムを語る上でのキーワードは「繰り返し（反復）」と“心地よさ”。筆者は、リズムを「予測するためのパタン構築」と考え、予測できることは省力化につながり、脳への負担を軽減できるとしている。また、言語リズムは「ポーズで区切られた構造が繰り返すこと」であり、「その繰り返す構造は一定であるとは限らないが、母語話者が心地よさを感じるものである」としている。

3-2「音節・モーラ」では、まず「音節」から論を展開している。聞こえ度配列原理（Sonority Sequencing Principle）に基づいて音節を捉え、音節は聞こえ度の高い音（主に母音）を核として、その核から近いほど聞こえ度が高く、離れるにつれて聞こえ度が低くなるとしている。

一方、ゴスポドネティッチ（1982）が「緊張度」という基準を用いて、音声を尺度化したことに触れ、聞こえ度と緊張で配列した音声の順序は同様であるが、調音器官が弛緩した状態が音節の核で離れるに従って狭めが強くなる。時間軸に沿って、「緊張の持続」や「急激な上昇」、「緩やかな弛緩」のような記述ができるため有用であると解いている。

音節の連続が言語リズムを作っているというより、言語リズムがその言語の音節を制限していると考えられ、日本語では音節の92%が開音節あること（英語は44%）を考慮すると、日本語のリズムには、複雑な構造を持ち音節量の大きい音節は取り込みにくいとしている。

「モーラ」に関しては、次のように論を進めている。モーラは緩やかながら「母語話者が共有している心理的な等時感覚」と定義できる。河野（1988）によると、日本語の1モ

ーラは英語やスペイン語の1音節分の長さと比較して持続時間が短く、ばらつきがないものである。日本語がモーラ・リズムを刻むことができるのは、開音節の比率が高く1音節（軽音節のみ）の短さと安定性によっている。河野は、実験の結果から日本語の2モーラの長さは英語やスペイン語の1音節に相当するとしている。研究成果からしても、軽音節をいかに“短く”発音するかを課題にすべきであるとしている。

3-3「言語リズムの分類」では、Pike(1945)に始まり、以下 MaCawley (1968)、小泉 (1996)、河野 (1997) の言語リズムの分類法を紹介している。筆者は、独自の分類法を提案しており、言語リズムは何でリズムを刻むのか（音節かモーラか）とフレーズ毎に現れるパターン（ストレスかピッチか持続時間が）を分けて考えている。日本語は「モーラでリズムを刻むピッチリズム言語」と定義できるとしている。

次に、中国語と韓国語の言語リズムに言及していく。まず、中国語のリズムでは、楊(2004)が、中国語の基本となるリズム単位は「標準音脚」で、それを2音節を1単位と考え、前後音節の時間長の割合は4対6になると主張している。音節でリズムを刻み、持続時間でフレーズを形づくる言語と判定できるとしている。

韓国語の言語リズムに関して、秋(2008)は「標準韓国語の基本的なピッチ・フレーズの型はLHLHである」(Lは「低い」、Hは「高い」を表す)。「一つ一つの単語に、決まったピッチのない韓国語は、単語よりも大きい、句や文のレベルで、音のピッチの変化を使って“音声的な際立ち”を表す」(Lは低い、Hは高い)。「音節でリズムを刻み、ピッチでフレーズを形づくる言語」であると述べている。中国語も韓国語もモーラではなく、音節でリズムを刻む言語であり、その音節は日本語の短音節(1モーラに該当)よりは大きな音節量を持つものであることが想定できるとしている。

3-4「リズムの指導法」では、木村(2001)が既存の音声指導法について、「音声指導法の多くは指導・矯正が単音に向けられていること」、「方法論が分析的、意識的であるのが特徴である」と述べている。音声習得は最も運動に近く、「わかる」が「できる」に直結しにくい分野である。

母語にカスタマイズされた耳、脳に新しい音韻構造を生じせしめるためには、ロベルジュの「経験を通して体得するものだ」という発想がキーワードになる。

最後に、具体的な指導法として、手拍子による拍感覚養成、鹿島(2002)のリズムユニット、串田、河野(2004)のプロソディ・グラフ、中川(2010)の「フレージング」、宮本、大崎(2011)の聞き取り中心の指導法、赤木他(2010)のビートに合わせたリス

ム練習等を紹介し解説している。そして筆者は課題として以下の点を挙げて本章を結んでいる。

1. 各特殊拍の音韻的特徴が十分に伝えられない
2. 日本語の1モーラの“短さ”を習得するための工夫に欠ける
3. 自己モニター形成のサポートができていない

4 調査

4章は、4-1「調査概要」、4-2「結果」、4-3「分析」の順で論を展開している。まず、4-1「調査概要」では、漢語のリズムパターン調査の概要について述べている。対象としたのは『デジタル大辞泉』に収録されている約22万語。漢語のリズムパターンは2拍から4拍で20パターンに限られるが、いずれのパターンにどの程度分布するか調査を行ったとしている。

4-2「結果」では、全体における特殊拍を含む割合は83.1%と非常に高く、二つ以上特殊拍を含む割合は26.0%を占め、特殊拍の正しい習得なくしては漢語の意味弁別に支障を来す恐れがあることが示唆されるとしている。漢語が長音拍を含む割合は45.4%、撥音拍を含む割合は42.7%、促音拍を含む割合は5.4%で、長音拍と撥音拍を含む割合が非常に高い点、促音拍を含む割合はさほど高くはないことなど、松崎の調査と同様の傾向であったとしている。

4-3「分析」では、H（特殊拍を含む重音節）が圧倒的に多く含まれ、如何に漢語に特殊拍が多く含まれているかが分かったとしている。言語リズムの比較から、2・2型は学習者がさほど訓練をしなくても、日本語らしい発音が可能になるのに対して、2・1型と1・2型は軽音節と重音節の組み合わせであり、その弁別が要求されるため、発音が2・2型よりも困難であることが予想されるとしている。

5 実験

5章では、5-1「実験概要」、5-2「実験協力者」、5-3「実験結果」、5-4「分析」の順で論を進めている。

まず、5-1「実験概要」では、漢字圏学習者がどのように漢語を発音しているのか行った実験を概要している。学習者が読み上げた音声を録音し、その音声を日本語母語話者

が判定した。サンプルの漢語は漢字ロゴトム 72 語を用いた。漢字ロゴトムを用いる理由は、どの実験協力者にとっても初出の文字配列を用いることで、漢語の読みにおける情報処理のストラテジーがより顕著に現れると期待したことによるとし、漢語の9のリズムパターン（L・L型、H・L型、L・H型、H・H型、LL・L型、L・LL型、H・LL型、LL・H型、LL・LL型：Lは軽音節、Hは重音節）を全て含むように配慮している。

5-2「実験協力者」では、協力者の選定は漢字の難易度を考慮し、日本語が中級以上であることを条件とし、判定で意見が割れたものに関しては、母語話者による多数決にて判定結果としたとしている。

協力者の内訳は、韓国語母語話者 29 名、中国語母語話者 20 名、女性 31 名、男性 18 名、平均日本語学習歴 2 年 11 か月である。日本語レベルが中級以上と判断したもののみ協力に依頼したとしている。

5-3「実験結果」では、まず、グラフの中で使用する用語を以下のように解説している。

「正解」書き取り、音の判定とも正しい

「追加」書き取りは正しいが、音の判定で本来ないはずの拍が認められた。

「不足」書き取りは正しいが、音の判定であるべき拍が認められなかった。

「拍交代」書き取りは正しいが、音の判定であるべき拍と違う拍が認められた。

5-3「実験結果」では、正解率が低いのはH・L型(69.8%)、LL・L型(76.9%)、L・H型(78.8%)等の2拍と1拍の組み合わせであり、その原因として圧倒的に多いのは拍の追加であるとしている。それに対して、最も安定しているのが2拍と2拍の組み合わせでLLL型(98.1%)、HLL型(95.6%)、LLH型(89.7%)であり、この中ではHH型が(83.9%)比較的正解率が低いとしている。

韓国語母語話者と中国語母語話者の比較対照では、最も高いのが2・2型で、最も低いのが2・1型という点で一致している。この二言語を母語に持つ学習者は、L(軽音節)を適切な持続時間で発音できていないことが正解率を下げている原因であり、音節リズム言語であること、しかもその音節量が日本語と比較して2倍に相当としていることに起因するとしている。

5-4「分析」では、漢字のリズムパターン毎の安定度を比較すると、 $LL > H > L$ という公式が成り立つ。音節リズムの言語を母語に持つ学習者にとって、HとLLは母語の音節に近い音節量であるため、発音しやすいが、Lを適切な“長さ”で発音することは難し

い。筆者はこれらの結果を言語リズムの影響を反映していると考え、音節リズム言語を母語に持つ日本語学習者にとって、HからLへのシフト・チェンジは非常に困難であるとしている。

6 考察

漢語の発音における問題は、主にHと組み合わされた場合のLが伸長するという問題であることが観察されたとし、また、その原因として言語リズムの違いが大きな影響を持っていると主張している。

7 VTS

7章では、7-1「基本的概念」、7-2「緊張 (tension)」、7-3「VT法を利用した音声指導」の順で論を進めている。

7-1「基本的概念」では、VTSに対する筆者自身の考え方を踏まえながら解説している。VTSは言語教育、音声教育という限られた分のみに適応する理論ではなく、「人体の生理とは如何なるものかというフレームの中で調音、聴取を捉えた理論」である。VTSを扱う理由は「リズムを含むプロソディレベルの指導に有効」だということであり、分析的に知識伝授する指導法には限界があり、「調音活動自体が運動である」という考えに基づいた指導法に大きな意義があるからだとしている。「音声聴取の優先」「言語の全体構造的性」「音声の伝送体・受容体としての身体」「最適要素」「リズム・イントネーションの優先」という5つの基本的概念を、具体例をまじえながら解説している。

7-2「緊張」では、VTSの主要な概念である「緊張」は、ユギ・ゴスポドネティッチにより提案され、「調音活動に伴う調音器官の筋肉の緊張、すなわち主動筋と拮抗筋との合成運動により作り出される生理的緊張」を意味している。物理的には声道内の狭めが強ければ強いほど、調音器官の緊張度が増すと考えれば理解しやすいとしている。

緊張という概念の優位点は、単音の対照・比較ができるだけでなく、プロソディの時間的変遷を表現することができる点にある。特殊拍の習得は、この緊張という概念を用いて指導するとしている。

最後に、7-3「VT法を利用した音声指導」では次のように解説している。

まず、従来の指導法の課題を以下のようにまとめている。

1. 特殊拍の音韻的特徴が十分に伝えられない

2. 日本語の1モーラの“長さ”を習得するための工夫に欠ける

3. 自己モニター形成のサポートができていない

これらの課題を解決するものとして、VT法の指導技術を紹介し解説している。

1) 身体リズム運動 (Body Movement)

身体全体を広義の調音器官・聴覚器官と捉え、身体を動かすことにより、本来の調音器官・聴覚器官を刺激し、正しい音声生成と聴き取りを促そうとする指導技法である。

2) わらべうたリズム (Nursery Rhyme Stimulation)

この技法は同じ（或いは類似した）リズムのフレーズを繰り返すことにより生理に訴え、正しいリズムやアクセント、単音の習得を目指す技法である。

3) SUVAG 機器の使用

低域周波数帯域を用いてリズム・イントネーションの聴取や、個別音の最適帯域周波数を選択し、最適な音声聴取を提供しようとするフィルタである。

4) 振動器の利用

電気信号を機械的な振動に変換して、リズムの知覚、無声音・有声音の弁別などに役立てようとする機器である。

5) 描画の利用

音連鎖と絵とを結びつける手法。グラディッチは「ことばと描画に共通するものの一つにリズムがある」と述べており、単音だけでなく、音連続を描画で表せることを示唆している。

以上のように、VTSに基づく音声指導法は全て感覚、人体の生理に訴えていることが特徴である。いずれも新しい刺激が「経験」となり、正しい音韻の「体得」に貢献するものと期待できるとしている。

8 音声指導

8章では、8-1「指導法の提案」、8-2「実践・研究1」、8-3「実践・研究2」の順で論を進めている。

8-1「指導法の提案」で、筆者は、7章で持論を踏まえたVTSの理論に基づく、身体運動と描画を用いたリズムの指導法を考案している。身体運動を取り入れるのは「経験による体得」につなげることで、音韻の緊張度を聴覚以外で伝えることが目的であるとしている。

リズム記号を用いたミニマル・ペアは以下の通りである。

1) 直音拍と長音拍

・ ・ — — ・ ・
きよかしょう きょうかしよ
(許可証) (教科書)

2) 直音拍、促音拍、長音拍

・ ・ } ・ — ・
きて きて きいて

3) 撥音拍と直音拍

— ∪ ・ ∪
おばあさん おばさん

他の視覚情報を利用した指導法と異なる点は

- 1) 高低の要素を取り入れていないこと
- 2) 描画で各特殊拍の緊張度を重視していること
- 3) フィンガーアクションという運動と結びついていること

が挙げられる。指導対象とする音の特徴を伝えるためには、身体運動は運動の軌道をなぞるだけではその目的は達成できず、教師が提示する運動を正しい緊張度で行うことが肝心であるとしている。

8-2「実践・研究1」では、2-1「実験概要」、2-2「結果」、2-3「分析」の下位項目に分けて論を進めている。

2-1「実験概要」では、前述のフィンガーアクションの実践例を紹介している。教師間、教師・学習者間で指導・学習方法を共有することでより効果が得られると考え、それを実践している。導入一か月後、教師、学習者にアンケートをとり、その効果や改善点等を検証した。

「共有」をキーワードにしたため、できるだけ学習方法と指導法をシンプルにする必要があったため、リズムのみに焦点を絞り、主に机の上の平面上で指を動かすという方法を選択している。

初級クラスでは、新しい課に入る際の語彙導入を音声だけでなく、フィンガーアクションを用いて行った。また、フィードバックは、音声や文字だけでなく、フィンガーアクションの動きと記号を併用したが、訂正する際に不安を口にする教師もいたため、指導

で困ったケースを共有しながら少しずつ解決していくというサポート体制をとったしている。

2-2「結果」では、「学習者の注意が特殊拍に向く」、「視覚的に示すことが効果的」、「フィードバックに用いた方が効果的」という教師の意見がある一方、「学生がその気にならない」といった否定的な意見も見られた。学生からは、「特殊拍に注意が向く」、「おもしろい」、「ディクテーションに役立つ」等の意見が見られたとしている。

2-3「分析」では、単音レベルの弁別的音声学習ではなく、特殊拍の習得へ意識を向かせることには成功したと分析している。学習者だけでなく、教師にもそういう変化が起こったことは意義深いとしている。また、遊戯性が学習意欲を高めたと述べている。その一方で、「意欲的に取り組まない学習者もいた」という意見もあり、クラス全体で効果をあげるために、教師間、学生間ともに、関心を「共有」する工夫が重要であることが再認識できたとしている。

指導法を共有することで、教師間にインタラクションが起き、教員室でも発音指導談議が行われるようになった。また、ピアの観点からも、学生同士が教え合う姿も見られ、クラスメートが学習のリソースになり得ることも経験できたとしている。

方法そのものの課題としては、7, 8拍以上の長いフレーズやセンテンスでは、一般的な発話スピードでの運動の実現は難しいとし、正しく発音ができていない部分のみフィンガーアクションでフィードバックさせる方法が実践的ではないかとしている。

8-3「実践・研究2」では、中野(2010)において、中野・大江(2008)で開発した音声指導の方法「フィンガーアクション」を韓国語母語話者に実践したとしている。

8-3「実践・研究2」では、3-1「実験概要」、3-2「結果」、3-3「分析」のように下位項目を立て論を展開している。

3-1「実験概要」では、漢語の読みを課題にして、韓国語母語話者に日本語の発音指導を行っているが、漢語を扱ったのは、本稿2-1「漢語を扱う意義」で述べた理由と同様であるとしている。

実験は、リズム記号導入前の音声と導入後の音声チェックの結果を比較・対照することで行い、特に長音に焦点を当ててサンプルを選定したとしている。

以下のリストに従い、音の長短によって意味弁別が行われる漢字語を、読み上げ式で発音、録音を行っている。次に、録音終了後に同サンプルの読みがなを書かせている。音声のチェックは日本語母語話者2名によってで行ったとしている。

漢字語彙サンプルリスト（抜粋）

1)	考古	高校	個々	孝行	孤高	公庫
----	----	----	----	----	----	----

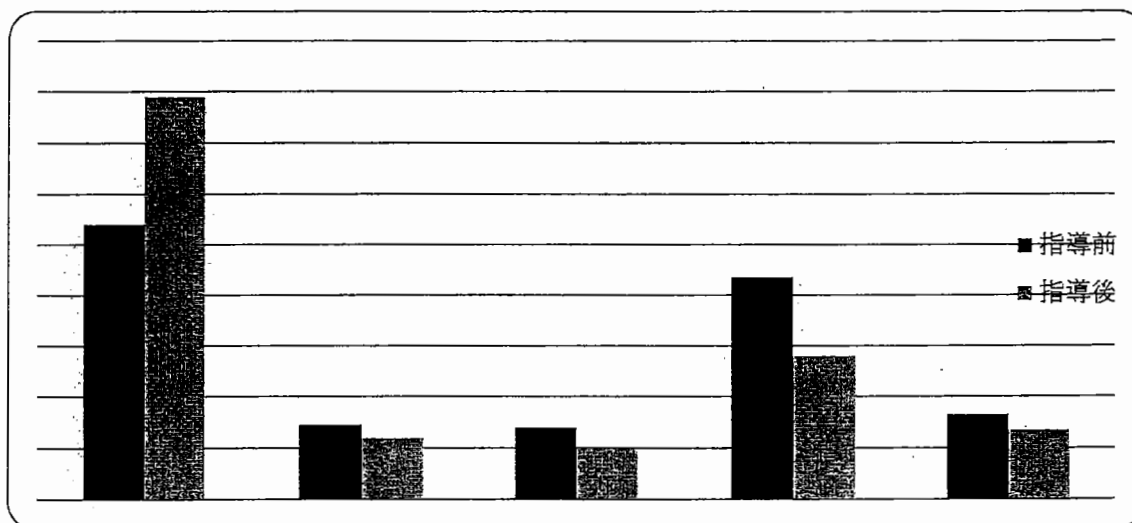
研究協力者は日本語上級レベルの学習者5名（男性1名、女性4名）である。

学習者の日本語学習歴は2年から5年で、年齢は全員20代であるいずれの協力上級と判断できるレベルである。指導は4週間、週1回のペースで行っている。

1回の指導は30分程度である。リズム記号を使い、多様なミニマル・ペアをプロソディが際立って聞こえるようハミングで提示した上で、学習者同士のペア練習を行っている。指導はコミュニケーションを意識したスキットを用いたとされている。

3-2「結果」では、まず、各サンプルの判定についての各カテゴリーの基準を示している。A=表記・発音とも正しい、B=表記と発音は一致しているが誤り、C=発音のみ正しい、D=表記のみ正しい、E=表記・発音ともに誤りまたは無回答。以上5つのカテゴリーに分けて評価を行っている。

グラフ9「指導前と指導後の変化 協力者全員の傾向」は以下の通りである。



全体の変化として目立つのは、「A 表記と発音がともに正しく回答できた数」が108個から158個に増加し、それに対して、「D 特に表記のみ正しく回答できた数」が87個から56個と減少している。以前は正しく書いていても正しく発音できなかったサンプルであるが、音声指導を経て正しい発音ができるようになったことが示唆されるとしている。

改善が見られなかった研究協力者Dのアンケートからは、羞恥心から指導を受けるモ

モチベーションが上がらず、心理フィルターがかかった状態であったことが効果に何らかの影響を及ぼしたことが推察されるとしている。

3-3 「分析」では、実践した音声指導を分析した結果、以下の3点が確認できたとしている。

- 1) リズム記号の使用により、漢字のみの表記よりも長音の発音習得に効果が見られる。
- 2) 「表記上は問題ないが正しい発音に至っていない語」が「経験」を経ることで「体得」につながる。
- 3) 発音指導においては特に学習者のモチベーションの欠如が学習効果に影響を及ぼすことが再認識できた。

コースに発音の授業を組み込む場合、心理フィルターをできるかぎり取り除いた状態で行えるよう配慮する必要があるとしている。

9 結論

本論は、冒頭より言語リズムが第二言語の音声にどのような影響を与えているかという視点で論を進めてきたが、言語リズムとは、調音器官の緊張度の制御機構であるとしている。調音器官の運動パターンが時間軸の中で繰り返され、言語音は、そのパターンの繰り返しの中に組み込まれ、意味を成し、音声によるコミュニケーションを可能にしている。パターンを繰り返さなければならない理由、すなわち、言語がリズムを持つ理由は省力化であるとしている。次にどのようなパターンが現れるか予測できることで聴き取りは容易になり、リズムに乗せて発話することで指令系統の負担が軽減されるのであるとしている。

モーラリズムの日本語は、音節一つ一つの構造は単純で、緊張と弛緩の振り幅が小さく、その結果、基本となる1音節は軽く短いものになる。一方、音節リズムの言語は、音節一つ一つの構造は比較的複雑で、緊張と弛緩の振り幅が大きく、調音に時間を要する音も取り込むことが可能である。

中国語母語話者、韓国語母語話者の日本語学習には、異なるリズム体系が“ずれ”が生じさせる。音節リズム言語の1音節は音節量が大きく、日本語の2拍分の音節に相当することになる。有標・無標の考え方で捉えると、学習者にとってHやLLが音節量的に無標で、聴取、生成に困難を感じるのは、有標のL（軽音節）であるとしている。

この結果を受けて、筆者は、音声指導法は、分析的ではなく「経験」を通して生理に訴え、「体得」につなげる方法が最善であるとし、リズムの指導方法を新たに提案した。本稿

で提案した方法は、身体運動（フィンガーアクション）と描画（リズム記号）を組み合わせた方法である。特殊拍の緊張度にフォーカスを当てた点、運動による緊張度の提示で自己モニター形成をサポートしようという意図を持っている点等が従来の指導法に欠けていた点であるとしている。

音声分析ソフトが発達した昨今では、持続時間やピッチカーブ等がその場でデータとして得られる環境にある。しかし、そのデータをそのまま学習者に提示するだけでは、問題の解決には至らないケースが多い。それは、調音が運動であるという捉え方が欠けているからであるとしている。「実際に発音してみて感覚として体得する」ことなしに習得はあり得ない。その音声言語の根本となっているのが「言語リズムはミクロの視点からだけでは捉えられない」ということである。本稿は若干冒険的ではあるが、音声現象を言語リズムと言うマクロの視点から捉え、指導方法の考案・実践までを試みたとしている。その理論的基盤としたのは VTS の 5 つの原理と緊張の概念である。日本語音声教育はミクロの視点に偏る傾向が見られる。筆者はこれを否定するわけではないが、ミクロとマクロは二者択一の観念ではなく、ミクロの視点がマクロを補い、マクロの視点がミクロを補う補完し合う関係であるとしている。その結果、相乗効果が生まれ、螺旋状の構造を生むことがより効果的な指導につながると結んでいる。

10 今後の課題

一部の語彙にはリズムパターンとアクセントに相関性が見られ、高低の要素をどのように取り入れていくかが今後の課題である。カナ読み音声を分析することにより、漢語との対照実験が可能となり、表出した結果が漢字によるものなのかが特定しやすくなるとしている。また、自然なコミュニケーションに必要な発話単位である十数拍のフレーズ、或いはセンテンスを題材として分析を行うことで、よりマクロなリズムグループの傾向を掴むことができるかと結んでいる。

8 参考文献

9 資料

IV 論文の総合評価

「論文提出までの経緯」

筆者は、平成20年4月本学言語教育研究科博士後期課程言語教育学専攻に入学し、修了単位10単位を取得し、外国語（韓国語）検定試験にも合格している。平成25年3月博士後期課程を満期退学している。

本論文は、言語教育研究科博士論文申請規定A日程により進められている。平成22年6月14日に、学位論文提出許可願いが出され、平成22年6月25日、言語教育研究科委員会で承認されている。博士課程入学後から論文提出時までの業績は、『拓殖大学言語教育研究』、及び学外の学会等の発表を含め、計6本となる。完成論文発表会は、平成25年1月12日に実施され、論文は平成25年1月26日に受理されている。審査委員による論文審査を平成25年7月26日に行い、審査の結果、全員一致で「合格」とし、続く、最終試験（口述試験）を、平成25年9月6日に実施し、審議の結果全員一致で「合格」と判定した。

V 審査所見

本論文の特徴を箇条書きにして所見を述べることにする。

1. 本論文の特徴は「言語リズム」に焦点を当てたことである。アクセント、イントネーションに焦点を当てた論文は多数存在するが、言語リズムが如何に音声習得に関わっているかというマクロ的観点から音声教育を論じた論文は稀有である。
2. 漢字圏の日本語学習者におけるリズム感覚を調査する方法として、漢語の熟語として存在しない漢字2語を組み合わせたものを調査サンプルとして使用している点は、他の論文には見られないものである。母語干渉が顕著に現れる調査方法であり、方法論的にも新しいアイデアであり評価できる。本来同一だった音が漢字圏各地域に伝播し、言語リズムというフィルターを通してどのような変形が生じ定着しているのか、それが日本語学習者にどのような影響を与えているのかを解明したのは大いに評価に値する。
3. 言語リズムの定義及び分類法に関しては多くの研究者が試みてきたが、言語リズムを「調音における緊張の制御システム」とし、VT法の重要な概念である「緊張」を用いてリズムを定義している点で、他の音声学には見られない新たなアプローチであり、音声学上、音声指導法の観点から非常に意義があると考えられる。

また、言語リズムの分類法として、リズムを刻む単位（音節かモーラ）とフレーズを

形づくるプロソディックな要素（ピッチかストレスか持続時間化）を分けて考えたのは、新しい試みとして大いに評価できる。

その分類に従い、日本語、中国語、韓国語各言語の言語リズムの特徴の明示を試みた点も評価に値するものである。音節リズムの言語（中国語、韓国語）とモーラリズムの言語である日本語では、1音節（日本語の場合は軽音節のみ）で受容できる音の量が異なる。それ故、日本語の漢字音（音読み）は1拍で読む字と2拍で読む字の二通りができた。本論では漢字音をH（VV、VC、CVV、CVCの重音節）とL（V、CVの軽音節）、LL（Lの連続）に分別し、漢語内におけるそれぞれのふるまいを検証した。結果は中国語母語話者と韓国語母語話者にとって、母語の1音節に近いHとLLは無標な存在で、Lが有標な存在であるというものだった。Hと組み合わせたLが目立って伸長しやすいことから、筆者はそれを言語リズムの相違で説明しているが、この点でも新たな分析方法であり、評価できるものである。

4. 筆者は、VTSの理論に基づき、身体運動と描画を併用した新たなリズムの指導法を考案して、日本語学習者の発音指導で活用し効果を得てきたが、その理論的根拠を本論にて示した。他の視覚情報を利用した指導法と異なる点は

- ① 高低の要素を取り入れていないこと
- ② 描画で各特殊拍の緊張度を重視していること
- ③ フィンガーアクションという運動と結びついていること

であるとし、指導対象とする音の特徴を伝えるためには、身体運動は運動の軌道をなぞるだけではその目的は達成できず、教師が提示する運動を正しい緊張度で行うことが肝心であると、VT法の原理を新しい指導法に取り入れた点でも非常に評価できる。

5. 筆者は、3で述べたように「言語リズムとは、調音器官の緊張度の制御機構である」として、さらに「調音器官の運動パターンが時間軸の中で繰り返され、言語音は、そのパターンの繰り返しの中に組み込まれ、意味を成し、音声によるコミュニケーションを可能にしている。パターンを繰り返さなければならない理由、すなわち、言語がリズムを持つ理由は省力化である。次にどのようなパターンが現れるか予測できることで聴き取りは容易になり、リズムに乗せて発話することで指令系統の負担が軽減されるのである」と言語リズムに関する持論を展開させている点は、VT法の原理に基づきつつも、その考えを自分のものとして消化し、斬新な考え方に発展させていることは大いに評価できるものである。

中野二郎君は、研究者としてだけでなく、日本語教育機関での日本語指導経験も豊富であり、現在は、ポーランド、クラクフのヤギェロン大学の客員講師として日本語の指導にあたっている。個人が開発した新たな指導法は、発展途上であり改良の余地があると思われるが、本人の言語学的知識と現場での豊富な経験からすれば、必ず解決できるものと確信している。また、VT 法の実践者、将来の後継者として有望視される逸材であると考ええる。今後は、研究者として、また教育者として、多くの実践を積み、技術を磨き、発音指導のスペシャリストとして活躍することが期待される。

以上、本論文は、博士論文の水準を満たしているものと判断する。

VI 審査委員会結論

以上により、本審査委員会は、慎重・厳正な審査の結果、総合的に判断し、三委員全員が一致して学位申請者に対して、学位「博士（言語教育学）」を授与することに同意するものである。

以上